

# 研究ノート：学校音楽教育における「雅楽」の扱いに関する 基礎的研究

今 由佳里\*

(2010年10月26日 受理)

## A Preliminary Study of Traditional Music “Gagaku” in Music Education in Japan

KON Yukari

### 要約

近年、日本音楽に対する扱いが変化しつつある。教育基本法では、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と伝統文化重視の方向性がうたげられている。平成21年3月に告示された新学習指導要領音楽科においても「和楽器の音楽を含めたわが国の音楽」「郷土の音楽」「我が国や郷土の伝統音楽」という記述がなされ、学校教育の中で日本音楽を教材としてより重視する傾向になってきていることがわかる。

本稿では、日本の伝統音楽のひとつである「雅楽」を取り上げ、学校音楽教育導入の可能性を示唆する。雅楽は、1200年以上前の形が現存し世界最古のオーケストラと言われている。しかし、学校音楽教育の中では、その貴重さは認識されつつも、難しい音楽というイメージが先行し、音楽授業の中で積極的に取り入れようとする音楽教師は少なかったのではなからうか。本稿は、このような現状を鑑み、学校音楽教育における雅楽の導入について、基礎的な資料を提示するものである。

キーワード：音楽教育、伝統音楽、雅楽

---

\* 鹿児島大学教育学部 准教授

## はじめに

雅楽の中で奏でられる楽器の中に「笙（鳳笙）」がある。この楽器が発する音色は古来“天からさしこむ光”を表していると言われ、人々に憧れの念を抱かせた。その形は、極楽に住んでいる鳳凰が、翼をたたんでやすんでいる姿になぞらえられている。同じく「箏篋」は“人の声”、「籠笛」の音色は、天と地の間をいきかう“龍の声”にたとえられ、これら三管の楽器の音色を合わせることによって、天・地・空が重なり合い、その音楽は宇宙を表すという思想が雅楽には古来より存在している。

かつて雅楽は、一般の人々が教習を受けることはできず、楽家のみで代々世襲してきた。しかし、このような制限も明治時代にはなくなり、現在では一般の人々でも雅楽を学ぶ機会に恵まれ、広く親しまれている。学校教育の中でも伝統音楽教育重視の背景からか、近年雅楽は以前より積極的に取り入れられつつある。本稿は、このような現状を鑑み学校音楽教育における雅楽の導入について、基礎的な資料を提示するものである。

### 1. 新学習指導要領音楽科（平成21年3月告示）における伝統音楽（和楽器含）の位置づけ

近年、日本音楽に対する扱いが変化しつつある。教育基本法では、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と伝統文化重視の方向性がうちだされている。平成21年3月に告示された新学習指導要領音楽科においても「和楽器の音楽を含めたわが国の音楽」「郷土の音楽」「我が国や郷土の伝統音楽」という記述がなされ、学校教育の中で日本音楽を教材としてより重視する傾向になってきていることがわかる。

以下に、新学習指導要領における小学校・中学校での伝統音楽の扱いに関する記述を載せる。

#### ○小学校

B鑑賞 (2) ア 我が国及び諸外国のわらべうたや遊びうた、行進曲や踊りの音楽など身体反応の快さを感じ取りやすい音楽、日常生活に関連して情景を思い浮かべやすい楽曲 (1, 2年)

ア 和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活とのかかわりを感じ取りやすい音楽、劇の音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の楽曲 (3, 4年)

ア 和楽器の音楽を含めた我が国の音楽や諸外国の音楽など文化とのかかわりを感じ取りやすい音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の楽曲 (5, 6年)

#### 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

(4) 各学年の「A表現」の(2)の楽器については、次のとおり取り扱うこと

ア 各学年で取り上げる打楽器は、木琴、鉄琴、和楽器、諸外国に伝わる様々な楽器を含めて、演奏の効果、学校や児童の実態を考慮して選択すること。

### ○中学校

- B 鑑賞 (1) ウ 我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、鑑賞すること。(1年)
- (2) 鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う。(1年)
- (1) ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して、鑑賞すること。(2, 3年)
- (2) 鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う。(2, 3年)

### 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

- (2) (…前略) なお、和楽器の指導については、3学年を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること。
- (3) わが国の伝統的な歌唱や和楽器の指導については、言葉と音楽の関係、姿勢や身体の使い方についても配慮すること。

### ○高等学校

- B 鑑賞 エ 我が国や郷土の伝統音楽の種類とそれぞれの特徴を理解して鑑賞すること。(音楽Ⅰ)
- エ 我が国や郷土の伝統音楽の種類とそれぞれの特徴について理解を深めて鑑賞すること。(音楽Ⅱ)
- イ 現代の我が国及び諸外国の音楽の特徴を理解して鑑賞すること。(音楽Ⅲ)

### 3 内容の取扱い

- (7) 内容のA及びBの教材については、地域や学校の実態等を考慮し、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽から幅広く扱うようにする。(音楽Ⅰ)
- (2) 内容のBの指導にあたっては、我が国や郷土の伝統音楽を含む多様な音楽文化について理解を深める観点から、適切かつ十分な授業時数を配当するものとする。(音楽Ⅱ)
- (2) 内容のA及びBの教材については、地域や学校の実態等を考慮し、我が国や郷土の伝統音楽を含めて扱うようにする。(音楽Ⅲ)

## 2. 雅楽の成り立ち

唐の制度や文物を日本へ導入した遣唐使は、楽譜や楽器、調律器も持ち帰っている。平安時代初めの遣唐使では、多くの楽人が遣唐使として唐へ渡り、音楽や舞を学び持ち帰ってきている。また後述するが、外來の音楽が多く日本へ導入された出来事に、752年の東大寺大仏開眼会がある。この開眼を祝うために、外国の多くの樂舞が奏されたことが記録に残されている。

雅楽は平安時代に行われた楽制改革によって、音楽と舞と歌に分類される。今日雅楽と呼ばれるものは、飛鳥・奈良時代から平安時代の初めにかけて大陸から日本に伝來した外來の音楽と、我が国で古來より育まれてきた音楽の二系統からなるものである。

図1は、神宮司廳がまとめた雅楽の構造である。

雅楽は、男性が携わることが慣例とされてきた。それは宮内庁楽部に、現在においても女性の楽師がないという現状からもわかる。しかし、奈良・平安時代には内教坊という女樂を司る機関があり、舞妓や倡女として、朝儀の奏樂を担当していた。これは『年中行事絵巻』の中に、内教坊の女樂として正月21日に行われた内宴の様子を描かれた絵からもわかる。内教坊による奏樂は、正月7日の白馬節絵、正月21日の内宴、9月9日の重陽の節絵、渤海使の饗応などで奏された。曲目は『教訓抄』に記載されているが、「玉樹後庭花」や「赤白桃李花」などである。

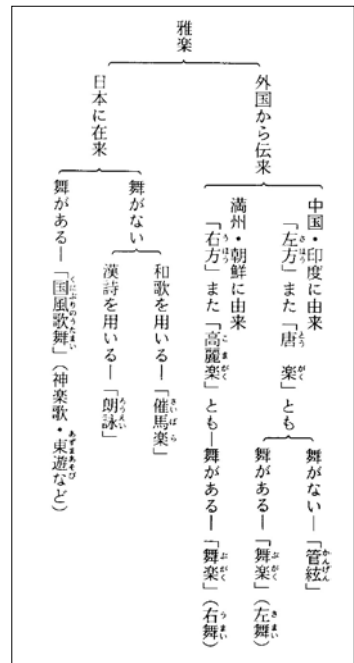


図1：雅楽の構造<sup>1</sup>

## 3. 左舞と右舞

舞樂には、中国・インド由来の左舞(左方舞)と朝鮮半島に由来する右舞(右方舞)がある。また、日本古來の歌舞である国風歌舞もある。左舞と右舞について、これらの相違点をいくつかあげてみる。

表1：左舞と右舞の比較

左 舞	右 舞
伴奏は唐樂 (笙、篳篥、竜笛、鞆鼓、太鼓、鉦鼓)	伴奏は高麗樂 (高麗笛、篳篥、三ノ鼓、太鼓、鉦鼓)
左大太鼓 (太陽・三巴・竜)	右大太鼓 (月・二巴・鳳凰)
舞人の装束は、赤系統	舞人の装束は、緑系統
舞人は、舞台向かって左側から入退場	舞人は、舞台向かって右側から入退場
歩みの第一歩は左足から	歩みの第一歩は右足から

雅楽には、陰陽思想が関係していると言われている。それは、表1の比較表からも推測できるが、互いに相反する陰と陽の性質から成り立っているためである。

例えば舞台後方の大太鼓は、左舞用と右舞用の二面が置かれている。この左右の大太鼓は、形は全く同じであるが、模様が左右対称になっている。左方の大太鼓の鼓面には三巴が描かれているが、右方には二巴、左方の火焰飾りは昇竜が彫刻されているが、右方は鳳凰、棹の先については、左方は日輪になっているのに対して、右方は月輪になっている。

また舞人の装束についても同様で、左方は赤系統の装束に金具は金であるのに対し、右方は緑系統の装束に金具は銀になっている。また、舞人の入退場や歩みの第一歩も、それぞれ対照的になっている。

#### 4. <sup>しょうが</sup>唱歌

雅楽は全て口伝で伝習される。楽器を持つ前には必ず、口伝で唱歌を練習することから始まる。口伝で師が歌う唱歌を弟子が耳で覚え、何回も繰り返して身体で覚える方法である。唱歌は、手でひざをうち（早四拍子の場合、1、2拍は上から、3、4拍は横から）、拍子を取りながら歌う。

以下に『越天楽』の笙譜（譜例1）と笙の唱歌（譜例2）を示す。笙は、5音から6音の和音からなる合竹による演奏が主となるが、唱歌では、和音を声で表現することは不可能であるため、合竹の名前の単音で歌われていく。

譜例1：『越天楽』の笙譜<sup>2</sup>

頭乙重	一	凡	
乙	凡	一	越 殿 楽
下	一	乙	
乙	乙	乙	
五	十	凡	
五	凡	ホ	
乙	乙	乙	
乙	乙	乙	
四	乙	乙	
一	乙	乙	

小曲 早田拍子拍子八  
ホ二拍子加後度三

譜例2：『越天楽』笙の唱歌

唱歌 東浦 秀明 採譜 今 由佳里

#### 5. 楽曲解説

以下に舞楽の曲目について、簡単な概説を加える。これらに掲載した楽曲は、曲にまつわる逸

話やその音楽性から、子どもたちの興味をかきたてやすく、学校教育導入の可能性が考えられるものである。

(1) 振鉦えんぶ

戦の勝利を神に祈るための舞。魔を払うために武人が舞う。舞楽が始まる前に必ず舞われる儀式的な舞で、舞台を祓い清める意味がある。舞楽は、左舞、右舞のどちらかに属することは前述したが、「振鉦」に関しては、左方、右方双方の舞人によって舞われる。

(2) 甘州かんしゅう

稲穂につく虫除けになるという曲。虫を食べにくる鳥の鳴き声が音楽の中へ入っているといわれている。唐の皇帝が、女官の袖が風になびいている様子からつくった曲と言われ、曲中には種をまくような仕草も見られる。

(3) 迦陵頻かりょうびん

極楽にすむと言われている迦陵頻伽かりょうびんがという鳥の舞。背中には羽、頭には花の冠をつけて子どもたちに舞われる舞。迦陵頻伽とは、下半身が鳥、上半身は人間(美女)という霊鳥。舞手は、両手には銅拍子を持ち、舞いながら打つ。『源氏物語』では、紫の上が、秋好中宮の御読経の日に、迦陵頻と後述する胡蝶の舞人の姿をした女童を、船で遣わしている。



図2 迦陵頻かりょうびんの舞手<sup>3</sup>

(4) 胡蝶こ

春に舞う胡の国の蝶が遊んでいる姿を表した舞。『源氏物語』「胡蝶」の中にも出現する、童女の舞である。蝶の羽を背中につけ、右手に山吹の花の枝を持ちながら舞う美しい舞。

(5) 人長舞にんじょうまい

天智受売命あまのうずめのみことが天の岩戸の前で舞ったのが起源とされている。人間の長である「人長」が、神に奉納する舞。右手には榊の枝を持ち、その枝先には直径30センチ程度の藤の輪がつけられ、三種の神器の一つである鏡を表すと言われている。

(6) 五節舞ごせちのまい

5人で舞う女舞。昔は大嘗祭の時、現在は天皇が即位する大礼のときに舞われる。「をとめごが、をとめさびすも、からたまを、たもとにまきて、をとめさびすも」という大歌にあわせて、笏拍子と笛、箏、和琴の伴奏で舞われる。舞姫の装束は、十二単で檜扇を持って舞われる。



写真1: 五節舞<sup>4</sup>

## 6. 正倉院の音楽

雅楽の楽器や舞は、外来から多く輸入されていることは前述した。日本の音楽文化の中で、重要な位置を占めている出来事に752年の東大寺大仏開眼法会がある。唐や林邑、天竺、新羅、渤海

海などからこの法会に参加し、外来音楽や舞踊、雑技が華やかに披露された。その時に演奏された楽器や衣装が、正倉院に現在も残されている。

奈良時代、国、郡、大寺院などには「正倉」と呼ばれる倉庫が建てられ、穀物や種々の財物、道具類が収められていた。この「正倉」がいくつか集まったものを「正倉院」と呼んでいたが、現在残る正倉院は奈良市にただひとつとなり、固有名詞化している。当初は、東大寺の倉庫の役目を担っていたが、現在は宮内庁管轄となっている。

### (1) 正倉院宝物

正倉院宝庫には、約 9000 点の宝物が伝わっている。宝庫は、東を正面とした南北に長い建造物である。内部は、北倉・中倉・南倉に分かれている校倉造の建物である。北倉には、聖武天皇の遺愛品や天皇在世中に収集した宝物類、中倉には、天平勝宝四年（752）東大寺大仏開眼会に際して、皇族や貴族が大仏に献納した宝物類（刀子や帯、数珠、ガラス器、銀器など）、南倉には、東大寺大仏開眼会関係用品やその後に行われた儀式関係用品（仏具類や楽器、伎楽面、楽装束など）が納められている。

正倉院宝物の特質は、その由来や年代が明らかなこと、保存が良好であること、その種類が多岐多様であること、数量が多いこと、優品が多いことが挙げられるが、さらに大きな特質として、宝物そのものがペルシアや中国、朝鮮など広範な地域に産するものが多いということである。

### (2) 東大寺大仏開眼会と楽舞

天平勝宝四年（752）四月九日、聖武上皇、光明皇太后、孝謙天皇が列席する中、インド僧菩提僊那が筆を持って東大寺大仏に開眼する。開眼の作法の後、声明の供養などが続けられ、その後国際色豊かな楽舞が開始された。まずは日本古来の舞である大歌舞に始まり、中国の唐散楽や唐中楽、朝鮮半島の高麗楽、タイあるいは朝鮮半島南西海上など諸説がある度羅楽、ベトナム南部の林邑楽、そしてペルシアやインド、中国南方の呉の国の要素が混在した仮面劇伎楽等が演じられた。



写真 2：唐散楽「渾脱」の舞装束紫 純 半 臂<sup>5</sup>

### (3) 正倉院宝庫の楽器

正倉院には、十八種七十余点の楽器が伝わっている。正倉院に伝わる楽器のルーツはイラン、インド、朝鮮半島もあるが、中国で形式的に完成されたものが多い。

○絃楽器：五弦の琵琶、四弦の琵琶、阮咸、箏篋、琴、箏、瑟、新羅琴、伽耶琴、和琴

○管楽器：尺八、横笛、笙、竽、簫

○打楽器：腰鼓、方響



写真3：螺鈿紫檀五絃琵琶<sup>6</sup>



写真4：螺鈿槽空篋<sup>7</sup>  
(復元模造品)

#### (4) 楽舞に用いられた品々

東大寺大仏開眼会では、伎楽や唐散  
 楽、唐古楽、高麗楽などの楽舞が上演さ  
 れた。正倉院宝庫には、このとき用いら  
 れた伎楽面が多数のこされている。ま  
 た、東大寺の法要に使用された楽舞の面  
 や舞い手の装束、演奏者の衣装、楽器な  
 ども伝えられている。



写真5：伎楽行道風景<sup>8</sup>

#### 正倉院宝庫に残されている伎楽面



写真6：呉女<sup>9</sup>



写真7：酔胡王<sup>10</sup>



写真8：迦桜羅<sup>12</sup>



写真9：獅子<sup>11</sup>

#### おわりに

舞楽を初めて目にした記憶は、近くの神社で行われていた祭礼の舞であり、六歳の頃であった  
 だろうか。幼いながら、その動きの勇壮さと透明感を感じる笙の音色に強く心を動かされた。そ  
 れはかつて戦乱で、都から逃れてきた楽師たちによって伝承されたとされている谷地八幡宮の  
 林 家舞楽である。この舞楽は、平安中期の楽制改革の影響を受ける前に伝承したため、渡来当  
 初のシルクロードの面影を残していると言われている。雅楽は渡来当時、現在奏されているより



も多くの種類の楽器によって編成されていた。それは、正倉院に残されている楽器の種類を見ても明らかである。当時の楽師は、外国から日本へ伝来された楽器の中から、日本人の好みに合う楽器を選び、楽器編成を行ったといわれている。その時に選ばれなかった楽器が正倉院に残されたという学説もある。現在奏されている雅楽は、いわば日本人の好みに合うように改良され、「和風化」された雅楽なのである。

本稿は、雅楽の基礎的な概要をノートとして整理したものである。それは、現在学校教育の中で重視されている伝統音楽学習の基礎資料になるものではあるが、不備な点など多く残されていることは否めない。この点に関して、今後の課題としていきたい。

## 謝辞

本稿を執筆するきっかけとなったのは、伊勢神宮雅楽長を務められた東浦秀明氏に雅楽器のひとつである鳳笙の稽古をつけてもらう機会に恵まれたためである。東浦先生には、楽器の奏法のみならず、伊勢神宮の祭礼と音楽との関係、神宮雅楽課内の構造など、一般には触れる機会が少ない貴重な資料や経験をいただく機会をいただいた。また、神宮楽師としての生活や仕事についても詳しくお聞かせいただき、私の雅楽への興味を益々募らせる契機をつくっていただいた。最後になるが、ここに感謝の意を記しておきたい。

## 参考文献

- 押田良久『雅楽鑑賞』文憲堂七星社、1969  
『神宮御神宝』神宮徴古館農業館、2008  
南谷美保『四天王寺聖霊会の舞楽』東方出版、2008  
東儀俊美『雅楽への招待』小学館、2001  
東儀秀樹『雅楽』集英社、2005  
芝祐靖『雅楽入門事典』柏書房株式会社、2007、  
『別冊太陽 日本のこころ 正倉院の世界』平凡社、2006  
『別冊太陽 雅楽』平凡社、2004

## 注

- 1 神宮司廳『神宮舞楽解説』2008
- 2 香川雅正会編集『鳳笙譜』2002
- 3 芝祐靖『雅楽入門事典』柏書房株式会社、2007、p.71
- 4 東儀兼彦「宮内庁楽部の活動」『別冊太陽 雅楽』平凡社、2004、p.63
- 5 『別冊太陽 日本のこころ 正倉院の世界』平凡社、2006
- 6 前掲書、p.30
- 7 前掲書、p.29
- 8 前掲書、p.43

- 9 前掲書, p.42
- 10 前掲書, p.42
- 11 前掲書, p.42
- 12 奈良国立博物館編集『第62回「正倉院展」目録』仏教美術協会, 2010, p.60